The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	桐壺院の遺言の機能 : 若菜上巻を起点として
Author(s)	朴, 貴仙
Citation	語文. 1999, 72, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68941
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

桐壺院の遺言の機能

――若菜上巻を起点として――

朴（パク） 貴仙（キソン）

一、問題の所在

『源氏物語』若菜上巻は、出家を志す病身の朱雀院が、女三宮の婿を選ぼうとするところから始まる。いわゆる物語第一部の最後とされる藤裏葉巻から若菜巻への展開についての研究は、[1] 早くからなされており枚挙にいとまがないが、いま筆者が注目しているのは、若菜上巻冒頭で語られている桐壺院の遺言である。

桐壺院は、賢木巻で朱雀院に遺言を残した。それが十数年の歳月を経た今、朱雀院の口から語られる。そしてまた、朱雀院の言葉を聞いた光源氏も、その遺言に触れる。なぜここで桐壺院の遺言が想起されねばならなかったのだろうか。さらに、この遺言が想起されるのが、女三宮の六条院降嫁前なのはなぜなのだろうか。

本稿は、右のような疑問を起点として、桐壺院の遺言が物語の中で、いかに機能しているのかについてを考察しようとするものである。

二、女三宮の系譜

朱雀院の第三皇女である女三宮は、晩年の光源氏の前に突如登場する。女三宮については、人物の造形と性格の描写、六条院への降嫁、あるいは柏木との不義などによる周囲への影響といった面が多く議論され、多大な成果があげられている。[2] 本節では、女三宮の系譜や彼女を取り巻く環境を取り上げながら、女三宮が六条院に存在することについて考察を加えてみたい。

若菜上巻において、女三宮の母は先帝の姫君である藤壺女御で、外祖母は更衣であったことが語られる。従来の研究においては、この母系についての側面が重要視されていたように思われる。[3] 確かにその母系を辿ると、女三宮は藤壺中宮の姪、紫上の従姉妹であり、彼女が「紫のゆかり」である所以とされている。女三宮の母の「藤壺」女御という名が、光源氏の栄華物語の根幹をなす藤壺中宮を想起させることも事実である。また、朱雀院の東宮時代に入内した藤壺女御は、「ものはかなき」更衣腹で後見もなかった。そこに弘徽殿大后が妹朧月夜を参内させたため、藤壺女御は後宮世界において圧

倒されてしまう。朱雀院の寵愛だけを頼りにしていた藤壺女御は、世の中を恨みながら死んでいった。この最期は明らかに桐壺巻を想起させるものであり、女三宮と桐壺更衣一族との関連を示している。以上の点からみれば、女三宮の母系について言及されることが多いのも、当然のことなのである。

しかし、筆者は女三宮の父系にも注目すべきであると考える。女三宮の父朱雀院は、弘徽殿大后の息子であり、右大臣一族に属する。すなわち、もともとこの一族は、桐壺更衣側の光源氏とは相反する勢力なのである。

周知のごとく、桐壺巻以来、弘徽殿大后側と光源氏の母桐壺更衣側との間には深い確執があった。例えば、朱雀院と光源氏との立太子争いから始まる政治的葛藤、光源氏と左大臣の娘葵上との結婚、朧月夜事件など、両者は公私にわたって対立し続けている。あるいは、光源氏が明石から帰京した時、弘徽殿大后は、「つひにこの人をえ消たずなりなむこと、と心病み思しけれど」（澪標一・二六九）[4]と悔いるほどであり、彼女は生涯をかけて、桐壺更衣一家との権力闘争に執念を燃やしてきたともいえるのである。

とすれば、二つの相容れない力関係が、若菜巻において女三宮の降嫁により強烈に結ばれてしまうことには、違和感を覚えざるを得ない。なぜ、弘徽殿大后側の系譜に位置するはずの女三宮が、光源氏の栄華を現出する六条院に存在することができるのだろうか。

三、桐壺院の遺言の機能

若菜上巻で、源氏の見舞いの使者として訪れた夕霧に対し、病弱な朱雀院は、次のように語る。

「故院の上の、いまはのきざみに、あまたの御遺言ありし中に、この院の御こと、今の内裏の御ことなん、とり分きてのたまひおきしを、おほやけとなりて、事限りありければ、内々の心寄せは変らずながら、はかなき事のあやまりに、心おかれたてまつることもありけんと思ふを、年ごろ事にふれて、その恨み遺したまへる気色をなん漏らしたまはぬ。（中略）内裏の御ことは、かの御遺言違へず仕うまつりおきてしかば、かく末の世の明らけき君として、来し方の御面をも起こしたまふ。本意のごと、いとうれしくなん。この秋の行幸の後、いにしへのことをとり添へて、ゆかしくおぼつかなくなんおぼえたまふ。」

（若菜上四・一五～一七）

ここで語られているのが、第一節で触れた桐壺院の遺言である。この遺言は一見、この後に展開される女三宮の六条院降嫁と関わりがないように思われる。しかしながら、実は六条院降嫁はこの遺言と無関係ではあり得ないのではないだろうか。なぜなら、桐壺院の遺言は、ことあるごとに光源氏の運命に影響を及ぼすものと考えられるからである。この点を明らかにするため、本節では桐壺院の遺言の機能というものについて考察する。

若菜上巻以前で、桐壺院の遺言に言及されるのは、賢木巻、澪標巻、薄雲巻であり、いずれも光源氏の運命が大きく揺れ動き、緊迫した政情が表面に噴出する巻々であった。これらの巻々において、桐壺院の遺言は何を喚起し、以後の物語の展開とどう関わっていくのか、桐壺院の遺言の内実とは何なのか、ということを考えてみたい。

桐壺院の遺言が初めて語られるのは賢木巻である。ここでは、桐

壺院の崩御と藤壺中宮の出家が語られる。臨終に際して桐壺院は、朱雀院へ、まず、冷泉帝のことを繰り返し遺言し、次に、

「はべりつる世に変らず、大小のことを隔てず、何ごとも御後見と思せ。齢のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ見たまふる。必ず世の中たもつべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに、親王にもなさず、ただ人にて、朝廷の御後見をせさせむ、と思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」　（賢木二・八八）

と、光源氏は必ず世の中をたもつ、すなわち帝王の相を備えているが、親王にもせず、臣下として朝廷の世話役にしておいたと言い残した。桐壺院は、光源氏を皇位から外したことを朱雀院に明かし、それを守るよう遺言しているのである。

桐壺院は、最後の拝謁に参上した東宮（冷泉帝）と光源氏にも、同じく遺言を残す。

春宮も、一たびにと思しめしけれど、もの騒がしきにより、日をかへて渡らせたまへり。御年のほどよりは、大人びうつくしき御さまにて、恋しと思ひきこえさせたまひけるつもりに、何心もなくうれしと思して、見たてまつりたまふ御気色いとあはれなり。中宮は涙に沈みたまへるを、見たてまつらせたまふも、さまざま御心乱れて思しめさる。よろづのことを聞こえ知らせたまへど、いとものはかなき御ほどなれば、うしろめたく悲しと見たてまつらせたまふ。大将にも、朝廷に仕うまつりたまふべき御心づかひ、この宮の御後見したまふべきことを、かへすがへすのたまはす。　（賢木二・八九）

藤壺中宮が涙ながら見守るなか、幼い東宮にいろいろ政治と関わりのあることを聞かせ、光源氏にも人臣として補弼すべき心構えと冷泉帝の後見になるべきことを繰り返し遺戒する。桐壺院は朱雀院には光源氏の観相にまつわる事柄を述べ、皇位継承を断念せざるを得なかった経緯を明かす一方、光源氏には臣下として生きてゆくことだけを言い残すことになるのである。

光源氏に皇位を継承させないということにおいて、桐壺院は大きな役割を果たしている。例えば、桐壺巻で、桐壺院は光源氏を臣下にとどめた。また、桐壺院の遺志によって、光源氏の子供である冷泉帝が皇位を継承する（このことについては後述）。とすれば、桐壺院の没した賢木巻以降、光源氏の皇位継承を規制する役割を担うのは、桐壺院の遺言ということになる。

澪標巻は、須磨・明石の流浪から帰京した後の光源氏が政治色を強めてゆく巻である。光源氏の変貌については、藤壺中宮の政治的変貌とともに多くの読みが提示されている。[5] いずれにしても、光源氏と藤壺中宮との政治的動きは、冷泉帝の皇位継承とその安泰を目的としたものである。

澪標巻において光源氏に訪れる大きな転機は、冷泉帝の即位と明石姫君の誕生である。光源氏は明石姫君の誕生を聞き、かつて受けていた宿曜の、「御子三人、帝、后必ず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」（澪標二・二七五）とのことばを思い出す。光源氏はその予言が当たったとしたうえ、自分の運命を反芻する。冷泉帝の即位を嬉しく受け止めながら、やはり自分は皇位を継承することはできないと自認するのである。そして、

「あまたの皇子たちの中に、すぐれてらうたきものに思したりしかど、ただ人に思しおきてける御心を思ふに、宿世遠かりけ

り。内裏のかくておはしますを、あらはに人の知ることならねど、相人の言空しからず」　（澪標二・二七六）

と思う。傍線部は、賢木巻で桐壺院が朱雀院に残した「ただ人にて、朝廷の御後見をせさせむ」（賢木二・八八）や、光源氏に残した「朝廷に仕うまつりたまふべき御心づかひ、この宮の御後見したまふべきこと」（同巻・八九）と対応しており、ここでまた桐壺院の遺言が蘇ってくるのである。光源氏は、桐壺院が大勢の皇子たちのなかで特に寵愛しながらも、人臣とした桐壺院の意志を思い起こす。

冷泉帝が即位し、次代の女御として明石姫君が生まれたということは、光源氏が皇位から遠ざかることを意味する。ここでも、桐壺院の遺言が出されると、光源氏は天皇位から遠ざかることが示されるのである。

薄雲巻の後半部の中心テーマは、藤壺中宮の死と冷泉帝出生の秘密の露顕である。この二つの出来事が記される中で、またもや桐壺院の遺言が登場することになる。

藤壺中宮の最後の言葉は桐壺院の遺言の想起からはじまる。藤壺中宮は、光源氏に対し、

「院の御遺言にかなひて、内裏の御後見仕うまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべること多かれど、何につけてかはその心寄せことなるさまをも漏らしきこえむとのみ、のどかに思ひはべりけるを、いまなむあはれに口惜しく」　（薄雲二・四三六）

と、感謝と労りを述べる。藤壺中宮は、冷泉帝に皇位を継承させようとした桐壺院の意志を受け継ぎ、それを守り通した。従ってここでの言葉は、単なる感謝を表すだけのものではないだろう。冷泉帝の安泰のために、光源氏が後見として仕え続けるということが、ここで確認されているのである。

一方、自分が不義の子であることを知って、譲位を仄めかす冷泉帝に対して、光源氏は桐壺院の遺言を持ち出し、

「故院の御心ざし、あまたの皇子たちの御中に、とりわきて思しめしながら、位を譲らせたまはむことを思しめし寄らずなりにけり。何か、その御心あらためて、及ばぬ際には上りはべらむ。ただ、もとの御掟てのままに、朝廷に仕うまつりて、いますこしの齢重なりはべりなば、のどかなる行ひに籠りはべりなむと思ひたまふる」　（薄雲二・四四六）

と堅く辞退する。桐壺巻で、桐壺院の決断で臣籍に降下され、帝王の位から遠ざかっていた光源氏に、薄雲巻において実の子により、皇位継承の可能性が開かれようとしているのである。しかし、それは、光源氏の辞退という形で閉ざされてしまった。ここに、光源氏の主張する桐壺院の遺志はもちろんのこと、藤壺中宮が想起する桐壺院の遺言が光源氏の皇位継承を阻むものとして働いているとみることができよう。

以上のように三つの巻にわたって考察を加えてきたが、そこで語られる遺言の機能は明らかであろう。すなわち、桐壺院の遺言は絶えず光源氏の即位を制止するものとして絶大な力を持ち続けているのである。

さてこのような考察を踏まえ、改めて若菜上巻における女三宮の六条院入りと桐壺院の遺言について考えてみたい。すでに見てきたように、桐壺院によって臣下と定められた光源氏は、桐壺院の遺言が現れる時、天皇という地位から遠ざけられるのである。若菜上巻

も同様に考えられるのではないだろうか。

東宮（今上帝）が、

「さし当りたるただ今のことよりも、後の世の例ともなるべき事なるを、よく思しめしめぐらすべきことなり。人柄よろしとても、ただ人は限りあるを、なほ、しか思し立つことならば、かの六条院にこそ、親ざまに譲りきこえさせたまはめ」

（若菜上四・三二〜三三）

と語ることによって、朱雀院は、女三宮を光源氏の養女として降嫁させる決意を固める。右の引用からわかるのは、今上帝が光源氏を明らかに臣下として扱っていることである。

今上帝の了解を得た朱雀院の強い要請で、光源氏は女三宮を預かることを承諾し、女三宮は六条院入りを果たす。その儀式は、女御・后の入内に準じて行われるという盛大なものであった。しかし、ここで注目したいのは、女三宮を光源氏自らが車寄せに出迎える、という部分に続く、「ただ人におはすれば、よろづの事限りありて、内裏参りにも似ず」（若菜上四・五六）という記述である。たとえ盛大な儀式が営まれたとしても、それは入内ではなく、あくまでも内親王が嫁ぐ相手は、「ただ人」、つまり臣下である光源氏であった。[6]

従って、この二つの例から、光源氏が「ただ人」であることが鮮明となってくる。女三宮が嫁ぐことによって、決して皇位を継承できないという光源氏の運命が決定付けられたことになるのである。ここにおいて、桐壺院の遺言はまっとうされたということになるのではないだろうか。だからこそ、若菜上巻で、桐壺院の遺言が語られる必然性があったと考えられよう。賢木巻で桐壺院によって語られた遺言の持つ規制力は、若菜上巻にまで及ぶほど強力なものであったといえる。

第二節で掲げた疑問もこの点から説明できるのではないだろうか。すなわち、桐壺院の遺言の強さゆえに、女三宮は、光源氏の反対勢力たる弘徽殿大后の一族を父系に持つにもかかわらず、六条院に存在し、光源氏と強烈に結ばれることになったのである。

四、おわりに

光源氏の皇位継承は、読み手にとって強い関心を抱かせるものであると思われる。作者はそのような読み手に、光源氏が皇位を継承するかのように思わせておきながら、桐壺院の遺言を存続させることによって、光源氏を皇位から遠ざけ、読み手の予想を巧妙に裏切り続けてゆくのである。

桐壺院の遺言は、光源氏を絶対に皇位に即けないために作者が周到に仕掛けた装置であったといえよう。

注

(1) 今井源衛氏「女三宮の降嫁」（『改訂版　源氏物語の研究』、未来社、一九八一年）、石田穣二氏「若菜の巻の発端について」（『日本文学研究大成源氏物語Ⅰ』、国書刊行会、一九八八年）、秋山虔氏「若菜」巻の始発をめぐって」（『源氏物語の世界』、東京大学出版会、一九六四年）、清水好子氏「若菜上・下巻の主題と方法」（『源氏物語の文体と方法』、東京大学出版会、一九八〇年）など。

(2) 女三宮の降嫁はいわゆる第二部の物語世界の主題と深く関わる問題として、秋山虔氏の上掲の論文をはじめ、大朝雄二氏「女三の宮の降嫁」（『講座源氏物語の世界六』、有斐閣、一九八一年）、深沢三千男氏「若菜巻の方法　序説」（『源氏物語の形成』、桜楓社、一九七二年）、今井久代氏「皇女の結婚――女三宮降嫁の呼びさますもの――」（『研究講座源氏物語の視界四――六条院の内と外――』、新典社、一九九七年）などを参照。

(3) 清水氏前掲論文。深沢氏前掲論文。石津はるみ氏「若菜への出発――源氏物語の転換点――」(『国語と国文学』、一九七四年十一月)。

(4) 『源氏物語』本文の引用は、小学館日本古典文学全集により、巻名・冊番号・頁数を記した。なお、引用文の傍線は筆者が私に付した。

(5) 伊藤博氏「『澪標』以後――光源氏の変貌――」(『源氏物語の基底と創造』、武蔵野書院、一九九四年)、清水好子氏「藤壺讃歌」(『源氏の女君　増補版』、塙書房、一九八八年)、鈴木日出男氏「光源氏の女君たち」(『源氏物語とその影響　研究と資料』、武蔵野書院、一九七八年)など。

(6) 『河海抄』でも、光源氏が車寄せに女三宮を出迎えにきたことに対して、「臣下の礼は妻を迎時は身つから車を寄る礼也云々　院中の義には此儀あるへからさる歟然而六条院たゝ人のことくふるまひて卑下し給よし歟」(玉上琢彌氏編『紫明抄・河海抄』、角川書店、一九六八年)としている。

――平成十年度本学大学院博士後期課程単位修得退学――